

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00389

研究課題名(和文)トムが建てた<家>：マーフィーの描くアイルランドの心性史

研究課題名(英文)The House that Tom Built: Murphy's Theatre and Irish History of Mentalities

研究代表者

三神 弘子(Mikami, Hiroko)

早稲田大学・国際大学院・教授

研究者番号：20181860

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、劇作家トム・マーフィーの作品の包括的な分析を通して、アイルランドの近現代史における、アナール学派の言う「心性史」を読み解く試みである。マーフィーが半世紀以上の年月をかけて繰り返し取り上げてきた、アイルランドという国に特有の暴力性、音楽性、宗教性、移民の問題といった諸テーマが、アイルランドの心性史において、どのように記憶され、物語として語られているかについて考察した。研究方法としては、出版テキストの分析に加え、マーフィーの制作ノート、数々の異稿、私信、劇評などを含むTrinity College Dublinが所蔵するMurphy Paperを活用した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

トム・マーフィーは、現代アイルランド演劇を牽引してきた劇作家の一人であると見なされてはいるが、不思議なことにアイルランド国外ではあまり認知されていない。その理由の一つに、マーフィーが第一にアイルランドの観客・読者を想定して作品を書いたこと、言い換えるとアイルランドという固有性にこだわりつづけたことがあげられる。アイルランド、もしくは西洋の視点では見えにくい部分を、日本/東洋という視点で、マーフィーの作品をアイルランドの心性史という文脈で読み解いた点に意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to reinterpret modern and contemporary Irish history, specifically what the Annales School terms the 'history of mentalities,' through a thorough analysis of Tom Murphy's body of work. It explores how Murphy's recurring themes--;violence, religion, immigration, and musicality--;are remembered and narrated within the context of Irish historical mentalities. The research methods encompass an analysis of published texts and the Murphy Papers housed at Trinity College Dublin, which include Murphy's notes, manuscripts, personal letters, and play reviews.

研究分野：人文学

キーワード：アイルランド演劇 トム・マーフィー 心性史 記憶 物語

1. 研究開始当初の背景

劇場という空間において、観客が一つの経験を共有するという意味で、演劇は集合的芸術である。そのため演劇は、社会を構成する人々の集合的意識の変容に対し、触媒としての役割を果たす場合があり、特にアイルランドのような小さな共同体では、演劇が社会に対して持つ影響力の可能性は大きい。本研究では、アイルランドの劇作家トム・マーフィー(Tom Murphy, 1935-2018)の作品群をアイルランド近現代史という文脈におき、それらをアナール学派の言う心性史(長期持続の中で中断することなく構成された無名の人間たちの歴史)として読み解くことを目的とし、マーフィーが一貫して描き続けてきたアイルランド人の精神史を、集合的かつ歴史的連続性の中でとらえ、今日的意味を探ることに焦点をあてたものである。マーフィーは作品を書くにあたって、時代の‘feeling of life’を再構築することを目指していると、繰り返し述べているが、それは、心性史を「ある特定のグループの心的態度や様相、言語で表すことができないイデオロギーなどを理解する試み」と定義するアナール学派の歴史観と重なっている。

マーフィーに関する研究は、作品論としての学術論文は数多く書かれているが、作家の全体像をさぐる目的で書籍として出版されたのは、4冊のみである(単著として Fintan O'Toole の著作(1987, 1994)と Nicholas Grene の著作(2017)の2冊、論集として *Irish University Review* のマーフィー特集(1987)と Christopher Murray 編集による論集(2010)の2冊)。マーフィーの劇作家としての評価を考えても、また、彼とともにアイルランド現代演劇の中核を担ってきたフリール(Brian Friel, 1929-2015)に関する研究書の多さと比較としても、非常に少なく、マーフィーの作品全体をアイルランドの歴史的な文脈に置き直して、再検討する意味は大きいと考えられる。

2. 研究の目的

舞台における上演という点では、マーフィーの作品の多くは現代アイルランド演劇の重要なレパートリーに加えられ再演が重ねられてきた。21世紀に入ってから、彼の作品を複数同時に上演しようという企画が相次いだ。2001年には、アイルランドの国立劇場であるアビー・シアターが6作品を一挙に上演した。また、2012年にはロンドンで開催されたカルチャー・オリンピックの一環として、ゴールウェイにベースを置くドルイド・シアター・カンパニーが、Druid Murphy と銘打って3作を一挙に上演し、その後、UK、ニューヨーク、アイルランド各地を巡回した。続けて2014年には、同じくドルイドにより、1988年のTVドラマをマーフィーが新たに舞台劇に書き直した *Brigit* と、その姉妹作品の *Bailegangaire* の2作が同時上演された。

マーフィーの作品は、それぞれ異なった時代の不確実性の中で、アイルランドとアイルランドの人々について書かれたものであるが、初演時から時間をおき、作品をまとめて再演することにより、マーフィーの作品に見られる歴史的連続性が提示され、アイルランド近現代史を概観する一助となったと考えられる。このように上演とテキストという緊張関係の中で、マーフィーがひとつのアイルランドの内的な歴史を書いているのではないかという仮説を探っていく。

3. 研究の方法

演劇研究において「上演」と「テキスト」の関係性をどのように捉えるかという問題は、

本研究においても常に中心的な問いとなった。昨今の傾向としては、Carolのように、「劇的パフォーマンスは、テキスト解釈を行ったあと、テキスト内に与えられた内容を超えた、その先にあるもの」と見なし、テキストの解釈よりも実際の上演に重きを置く研究が少なくないが、本研究では、「2.の研究の目的」で述べたように、舞台での上演、再演の意味を検討することの重要性に注目しつつも、「舞台上で俳優の身体を通して具現化されるものは、豊穡なテキストの一部にすぎないという」という立場で研究を進めた。演劇のテキストを分析するにあたって、実際の舞台での上演を念頭におくことは必要不可欠であり、劇場での上演に接した観客が、顕在意識のレベルで認識しにくいことを、テキスト内に読み込み、分析することを目指した。

また、改稿を繰り返すことで知られるマーフィーには異稿の数も多く、出版されたテキストが版によって異なる点を比較検討すると同時に、TCDの図書館、Abbey Theatreが所蔵するアーカイブに資料における手書き草稿、タイプ原稿、さらには書簡、劇評なども検討の対象とした。

また、2019年1月から7月末までの期間、Trinity Centre for Literary and Cultural TranslationとLiterature IrelandからTranslator in Residenceとして奨学金を受け、マーフィーの作品から*The House*と*Brigit*の翻訳を完了することができた。*The House*は研究のタイトルにも用いたことからわかるように、本研究の軸となる作品で、その翻訳作業を通して、細部にわたる分析が可能となった。

4. 研究成果

2019年、国際アイルランド学会(IASIL/International Association for the Study of Irish Literatures)の年次大会(@Trinity College Dublin)において、「Play Texts vs Performance: Tom Murphy's Case」というタイトルで口頭発表をおこなった。作品のテキストと実際の上演との関係性において、マーフィーの場合は、舞台での上演は、海面に浮かんだ氷山の一角(顕在意識)であるとする、劇のテキストは海面のすぐ下にある顕在意識との境界レベルにある前意識として舞台の上演を支え、さらにはテキストには具体的に書かれていないが、多くの観客が共有する、マーフィーの作品群全体とその上演にまつわる記憶、さらにはアイルランド演劇の120年あまりの歴史、アイルランドという国の歴史という大きな物語は、前意識のさらに下にある深い海に広がる潜在意識、集合意識として読み解くことができることを論じた。

また、この発表の際、ある質問者から受けた「暴力性」に関する質問が起点となり、マーフィー以外のアイルランド作家の暴力性について、質問者が編集するブラジルの雑誌より出版された。('Richard Bean's *The Big Fella* (2010) and Jez Butterworth's *The Ferryman* (2017): Two Plays about Northern Troubles from Outside of Northern Ireland', 2020)。さらに、2019年のダブリンでの国際学会が契機となり、2020年にポーランドのUniversity of LodzにおけるIASILの年次大会でマーフィーに関するシンポジウムを共同で運営することとなった。2020年の大会はコロナでキャンセルとなり、結果的に2021年にオンラインによる開催となり、「Tom Murphy in Japan」という題で、日本におけるマーフィーの受容について報告した。

また、「ドルイド・シアター・カンパニーにおけるサイクル上演:「ドルイドマーフィー」の場合」(『演劇研究』2021)という題で、2012年と2014年のサイクル上演を取り上げ、2001年の連続上演時の時代背景の違いを比較することによって、マーフィーの作品が再演

時のコンテキストによって、新たな解釈を可能にすることを明らかにした。(2001年の連続上演はケルティック・タイガーの好景気の最中での企画であったのに対し、2012年・2014年に行われた連続上演は、2008年のリーマンショック後、国全体が負債による深刻な経済危機、さらにはアイデンティティの危機にも直面するという状況の中で、「アイデンティティの危機に直結している中、国を自ら形作るために使用された材料や修辭的戦略の数々を再検討し、一度手放した上で、再びやり直そうという意図のもとに」行われたものである。

2023年には、Shaun Richards が編集する *Fifty Key Irish Plays* において、'*Famine* (1968) by Tom Murphy' というセクションを担当した。19世紀半ばに起こったジャガイモ飢饉の時代を舞台にした歴史劇を通して、1960年代という作品が執筆された時代、さらには21世紀における再演の意味を論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 三神弘子	4. 巻 45
2. 論文標題 ドルイド・シアター・カンパニーにおけるサイクル上演：「ドルイドマーフィー」の場合	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 演劇博物館紀要『演劇研究』	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mikami, Hiroko	4. 巻 73
2. 論文標題 RICHARD BEAN 'S THE BIG FELLAH (2010) AND JEZ BUTTERWORTH 'S THE FERRYMAN (2017): TWO PLAYS ABOUT THE NORTHERN TROUBLES FROM OUTSIDE OF NORTHERN IRELAND	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ILHA DO DESTERRO: A Journal of English Language, Literature in English and Cultural Studies	6. 最初と最後の頁 115-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5007/2175-8026.2020v73n2p115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Mikami, Hiroko
2. 発表標題 Tom Murphy in Japan
3. 学会等名 International Association for the Study of Irish Literatures（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mikami, Hiroko
2. 発表標題 Tom Murphy's The Wake: Performance VS Texts
3. 学会等名 International Association for the Study of Irish Literatures（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mikami, Hiroko
2. 発表標題 David Ireland's Cyprus Avenue (2016): A Contemporary Version of the Changeling in Post-Good-Friday Agreement Northern Ireland
3. 学会等名 Canadian Association for Irish Studies (CAIS) Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Richards, Shaun, Mikami, Hiroko 他39名	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 205
3. 書名 205	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------